

葦京辟雍儀禮の特質と歴史的役割(上)——殷周革命論ノート(五の上)——

高 島 敏 夫

(目次)

序論 西周王朝が殷の儀礼を行なうこと

一 『詩經』周頌の儀禮詩「振鷺」「有瞽」「有客」

二 葦京辟雍儀禮の特質

A 前期……「葦京」

B 中期前半……「葦京」

〔付論〕葦京辟雍儀禮と周頌儀禮詩との關係について

以上(上)

C 中期後半……「葦京」とは呼ばず、「葦」と呼ぶようになった。

D 後期……「葦」

三 葦京の役割の変遷

四 葦京の地について

序論 西周王朝が殷の儀礼を行なうこと

今回取り上げるのは葦京ほうけいへききう辟雍關係の銘文である。ただ葦京の名は、西周王朝の都として古代文獻に頻出する宗周や成周と違って、西周時

代の金文にしか見えない地名であるため、金文を讀まない人にはほとんど知られていない場所であろう。葦京の中心は辟雍という宗教的施設であるが、他にも多數の宮廟があり、祭祀儀禮が盛んに行なわれた場所として知られてきた。葦京を神都と呼び、とりわけ辟雍で行なわれた儀禮を重要視したのは恩師白川靜であるが、そのような呼び方に相應しい宗教的な意味をもつ場所であったといふことができる。

ただ西周時代でも中期の後半頃になると葦京の名前そのものが見えなくなり、單に葦とだけ呼ばれるようになる。後で改めて言及するが、この時期に鎬京への遷都があったようである。前期から中期前半頃までの限られた期間であったが、葦京が西周王朝の形成期において果たした役割は大きく、政治的な動向だけからは窺い知れない宗教的(思想的)な役割を果たしていたものと思われる。

葦京の名の見える銘文を取り上げた論考は決して多くはない¹⁾。しかも、葦京の所在そのものが明らかでないこともあって、儀禮の持つ意味への考察も十分でなかったように見受けられる。それは一つには、

殷周革命という出来事を周が殷を滅ぼしたという「歴史的事実」の現象だけを見ているからであって、この時期に腐心されていたところのもう一つの側面、すなわち殷王朝を宗主とする宗教的な社会秩序が崩壊した後の、新しい社会秩序を形成しなければならないという思想的な側面への目配りが、ほとんどなされていなかったためではあるまいか。

殷末から西周前期・中期に及ぶ百年の激動期は、超越神（至上神）「帝」を崇拜する殷の宗教秩序（體制）から、西周王朝の崇拜する「天」の宗教秩序（體制）へと大きく轉換する時期という側面をもっている。古來、易姓革命などといわれてきた「革命」の本質はむしろここにある。「殷周革命論」という総題で連載してきた拙論は、それぞれ異なる視覚から切り込んで考察したものであるが、改めて振り返ると左記のようなテーマ構成になっている²⁾。

- 1、克殷直後の西周王朝での祭祀儀禮を讀解した論考（《天亡殷》私考）
- 2、主に祭祀言語（雅語）に焦點を當てた論考（王姜の役割）
- 3、主に「天の思想」が浸透していく過程に焦點を當てた論考（天の思想と天子概念）
- 4、主に文字の傳播に焦點を當てた論考（冊令（命）形式金文の歴史的意味。と文字觀）

今回の拙論は、「この時期に腐心されていたもう一つの側面」に焦

點を當てて考察する。この問題はこれまで追究してきた前掲のテーマとも密接に係っているのでここでも適宜言及するが、今回のテーマは、殷系氏族がどのようにして西周王朝の宗教的秩序に参畫していたかという問題に關するものである。そしてその重要な舞臺になったのが莽京という場所であったということ。この件については恩師白川靜の『詩經研究通論篇』第四章「三頌研究」の「一周頌」に示された儀禮詩解釋を踏まえたものであるが、師の説を踏まながらも、それを今少し掘り下げるといふモチーフで展開するものである³⁾。とはいえ、白川と私の捉え方には微妙な差異がある。それは、西周王朝における殷系氏族の位置付けが、必ずしも征服者と被征服者の關係、あるいは支配と從屬の關係になっているわけではない點に注目したことに由る。これはあくまで微妙な差異としか言いようのない點であって、白川が全く氣付かなかったことというわけではない。むしろ、意識のどこかには感じていたながらも、それを明確に意識化するにいたらなかったという方が適切であろう。そのような捉え方の微妙な差異が隨處に見られる點にも適宜言及したいと思う。

先ほど簡條書きしたこれまでの拙論のうち、今回再度言及する必要があるのは1の《天亡殷》の讀解に關するものである。《天亡殷》は克殷直後と思われる時期に西周王朝内で行なわれた祭儀を記したものであるが、取り分け注目しなければならないのは、西周王朝内で天の祭儀を天室で行なった後、殷の祭儀である「衣祀」を行なっていることである。1では、この「衣祀」という語の捉え方において白川と私

との間で差異があることについて言及したのであるが、その差異は、おそらく殷王朝と西周王朝との関係の捉え方の差異だと思われる。該当箇所を引用する。

衣祀という語は殷末すなわち殷墟甲骨第五期に見える語で、白川の考證により、殷の祖考を合祀することを意味する語であることが明らかになった。だがそれは殷王朝としての合祭であつて、西周王朝の合祭を意味しない。殷を滅ぼした後で西周王朝が用いる語と捉えるならば、殷祀すなわち殷の祭祀と理解すべきではないか。殷代末期にいたって西周の文王は殷の祭祀を行なうことを受け入れ、殷との間に宗教的君臣関係を結んだ。その関係がここにも繼承されていて、殷の祭祀を行なっていると見るべきであろう。ということは、西周王朝における國家的祭祀には、西周王朝の超越神である天を祀る祭祀と、殷王朝の超越神である上帝を祀る祭祀とが行なわれたと見るべきであろう。このようにしてはじめて西周王朝は殷系氏族を西周王朝内に迎えられることができるのである。西周時代以降も殷の超越神が祭祀の対象として繼承されるのはそのような事情からである。その衣祀を王と呼ばれる宮室で行なったということになる⁽⁴⁾。

引用箇所のうちとりわけ「このようにしてはじめて西周王朝は殷系氏族を西周王朝内に迎えられることができるのである。」と記したところは、私と白川との間では捉え方の微妙な差異が出ているところ

である。金文に見える語で殷の祭祀を意味するものには、上記の「衣祀」の他に「殷」(①小臣傳殷)、「廢」(②土上卣)があるが、白川はこの「殷」・「廢」に對しても殷の祭祀という解釋をあえて回避した解釋を示している。おそらく殷の祭祀を西周王朝の中で行なうと解釋することに躊躇したということなのであろうが、私と白川との差異はまさにこの点にある。

ここで本稿の構成を簡単に記しておくことにする。先ず「一」で文献資料である「詩經」の儀禮詩を讀解し、その後「二」で、荊京關係の金文の特質を讀み取るという順序で進めることにしたい。前者は白川靜『詩經研究通論篇』や『詩經雅頌2』、後者は白川靜『金文通釋』によってなし得たものであるが、多少の部分的な變更や讀みの違いがあるのはすでに記した通りである⁽⁵⁾。

一 『詩經』周頌の儀禮詩「振鷺」「有瞽」「有客」

これらの儀禮詩はいずれも西周王朝の宮廟で歌われたものだが、その歌の中に客神が現われるのである。客神とは、白川の用いる言葉でいえば異族神ということになるが、具體的にいえば殷の祖神のことである。殷の祖神が白鷺の姿になって舞い降りたり、あるいは白馬に乗ってやって來たりするのである。そしてそれを迎える歌になっている。祭祀儀禮の場でこれらの歌を歌うことによって、殷の祖神を週の祭祀儀禮の場に迎え入れ、週の祖神とともに、そして周系氏族も殷系氏族も一緒になって歌い踊るという内容の儀禮詩である。

これらの歌は民謠的な歌謠の國風ではなく、周の宮中で歌われる周

頌の儀禮詩ということもあって、あまり馴染まれていないと思われるので、具體的な内容を理解していただく必要がある。それぞれに原文・書き下し文・譯詩を施し、最後に「考釋」を加えた。詩篇の解釋は『詩經雅頌2』にはほぼ全面的に負うところであることを特に記しておきたい。

「振鷺」

振鷺于飛 振鷺 于に飛ぶ
于彼西離 彼の西離に
我客戾止 我が客 戻る
亦有斯容 亦た斯の容有り
在彼無惡 彼に在りて 惡まるること無く
在此無斁 此に在りて 斁はるること無し
庶幾夙夜 庶幾はくは 夙夜して
以永終譽 以て終譽を永うせむ

【譯詩】

白鷺の群がはばたく
辟雍の西の水邊に
わが客神のお出ましぞ
その舞姿のなんと美しいことよ
彼の祖神にありて憎まれず
我が祖神にありても厭わるることなし
願わくは夜をこめて舞い踊り

千代に八千代に讃え合わんことを

【考釋】

白鷺の群れが辟雍の西の水邊に優雅に羽ばたいている。殷の祖神（客神）が白鷺の姿をして舞い降りてきたと見ているところだが、白鷺になって羽舞を舞っているのは殷系氏族であらう。その美しさに思わず見とれる人たち。殷系氏族も周系氏族も同じ空間にあってあちらこちらから異口同音に賞讃の聲が上がる。殷の神々が惡むことなど何もない。周の神々も厭うことなど何もない。今日は晝夜を徹して舞い踊り、いついつまでも讃え合う仲でありたいものだ。という趣旨の儀禮詩であるが、このような和氣藹々とした祭儀を通じて、殷の神々が周の中に受け入れられるということになる。言い換えれば、殷系氏族たちが西周王朝の中に受け入れられ、周の一員になっていくことを互いに認め合う意味をもつ祭儀だということができる。

「有瞽」

有瞽有瞽 瞽有り瞽有り
在周之庭 周の庭に在り
設業設虞 業を設け 虞を設け
崇牙樹羽 崇牙 羽を樹つ
應田縣鼓 應田 縣鼓
鞀磬祝圀 鞀磬 祝圀
既備乃奏 既に備はり 乃ち奏す
簫管備舉 簫管 備に舉ぐ

喤喤厥聲 くわうくわう 喤喤たる厥の聲 こゑ
肅雝和鳴 しゆくよう 肅雝として和鳴す

先祖是聽 先祖 是れ聽く

我客戾止 我が客 戾り

永觀厥成 永く厥の成を觀む

【譯詩】

盲目の樂師たちが居竝ぶは

周の宮廟の中廷なり

鐘の大小いくつも竝べ

飾り木には羽を立つ

小鼓に大鼓 懸ける鼓も

振り鼓にまた石磬と

打樂器類も様々に

うち揃って奏したり

簫と笛もと種々にあり

奏でる音は高らかに

靜かな音とも調和する

文武の先王 聽けよかし

わが客神もお出ましぞ

千代に八千代に聽けよかし

【考釋】

今度は周の宮廟の中廷である。そこに瞽がずらっと竝んでいる。瞽とは盲目の樂師のことで、中には靈力に優れる者もいて神秘性も漂う。

そのような者のことを神瞽という。中廷には鐘や鼓をぶら下げるための臺や横木がいくつもあって、横木の上には牙のような飾りが高く聳えたち、柱にはそれぞれ五色の羽を美しく飾り立てている。小鼓と大鼓があり、横木に懸ける鼓もある。また振ると小さな玉が當って音の出る振り鼓、それに石磬までもが大小の順に竝んでいる。箱形の樂器柷は箱の中を木で打つ。伏虎形の樂器圜は背中のギザギザをこすって音を出す。これらの打樂器類がもう音を出している。そこに簫の笛と笛とが加わって多彩なハーモニーを醸し出す。打樂器の大きな音が天高く響きわたったかと思うと、管樂器の靜かで和やかな音が人の聞き耳を立てる。選りすぐりの樂師たちの音が見事に調和して中廷を陶醉の世界へと導くのである。この古代オーケストラの音は周の祖王祖神たちに届けるためのものであるが、その音を聽いた客神である殷の祖神たちもやってくるのである。こうして周の祖神と殷の祖神とが同じ空間に會して、和氣藹々とした雰圍氣の中で、いついつまでも讃え合う仲でありたいと願う。

ここに描かれた古代オーケストラには編鐘と編磬とがすでに見えている。編鐘や編磬といっても西周中期後半頃から六器編成のものが現われはじめ、後期になると音階樂器とまでは言えないにしても、さらに數を加えて編鐘らしい編成になるというのが考古學的な情報であるから、この「有瞽」という儀禮詩の成立がそれ以前に遡ることはないだろう。また白川も語彙の面から中期後半頃に成立したのではないかという考えを示している。⁽⁷⁾

なお白川は「三頌研究」で「特に周の宗廟の中廷に瞽師のあること

をいうのは、その警師がもと、周の樂人ではないことを示したもの」と述べている。つまり周の宮廟の中廷で催された儀禮詩ではあるが主擔は殷人であり、殷人の樂師が演奏する音樂が周の祖神を樂しませ、また殷の祖神を呼び寄せてともに讃え合う閒柄になることを祈念する内容になっているのである。

「有客」

有客有客 客有り 客有り
亦白其馬 亦た其の馬を白くす
有妻有且 妻たる有り 且たる有り
敦琢其旅 其の旅を敦琢す
有客宿宿 客有り 宿宿たり
有客信信 客有り 信信たり
言授之繫 言に之に繫を授け
以繫其馬 以て其の馬を繫ぐ
薄言追之 薄く言に之を追ひ
左右綏之 左右に之を綏んず
既有淫威 既にして淫威有り
降福孔夷 福を降すこと孔だ夷いなり

【譯詩】

客神のおでましぞ
白馬の背に乗り現われる
限なく人々集まりて

色とりどりの姿なす

客神は心引き締めてあり

ゆったりとしてあり

馬を手綱で引き留めて

馬を繫いでおいた後

馬追うようなしぐさして

左右の人が馬をなだめる

客神の威光はなだ大いなり

もたらす福も大いなるらむ

【考釋】

この詩では白馬に乗った客神が現われる。殷人が白を貴ぶことは周知の通りで、西周時代の《作冊大方鼎》にも白馬を殷系氏族に賜與する「公賞作冊大白馬」のような例が見える。客神は殷の祖神である。客神を迎える場所は前の二首と同じように周の宮廟と考えていいだろう。そこには客神の降臨を待ち望んだ大勢の人々が詰めかけている。

「有客有客」という客神を乗せた白馬の來格を告げる聲がする。その聲に應じるようにして眞つ白な馬が現われる。中廷を埋めつくすほどの人々の中ほどに馬が進み入る。馬上の客神は氣を引き締めるような、またゆったりとした所作で馬から下りた後、手綱をぐっと引いて馬を留め、馬を繫いでおくのかと思うと、今度は馬を追うような所作をする。動き出す馬。左右にいた人がこの馬をなだめて落ち着かせる、という次第である。この祭儀の一連の動きを白川は「象徴的儀禮」として次のように記している。

白馬に乗じて参向する異族神を追捕し、繋ぎとめ、また安撫するのは、異族の神靈を懷柔するに象る象徴的儀禮で、「薄言追之」、「左右綏之」とはそのような模擬儀禮を寫したものである。こうして懷柔された客神は、やがてその威靈を現わし、わが周に大きな降福を与えるというのが、この篇の意味である。⁽⁸⁾

小結

『詩經』周頌の「臣工之什」に收められたこれらの儀禮詩の根底にあるのは、西周王朝側が殷系氏族を迎え入れるという考え方である。別の言い方をすれば「殷系の氏族たちが周王朝に参畫することを論理化した」⁽⁹⁾としても良いであろう。これは白川の詩經研究の恩恵を受けながら自分なりに捉え直したものであって、白川が「支配」「征服」と表現する捉え方との間に微妙な差異があると感ずるところでもある。詩篇の解釋そのものには「西周王朝側が殷系氏族を迎え入れる」といえるような捉え方が示されているのは見てきた通りである。これが「微妙な差異」と感じられる點だと思われる。これは金文を読む場合にも現われる差異なので、次節で改めて見ていきたいと思う。

前述したように、これらの儀禮詩の成立は、西周時代中期の後半にあたる懿王期頃だというのが白川の説であるが、この時期には鎬京の建設がすでに完了しており、儀禮詩の歌われる場所も鎬京の宮廟であったと推測してよいであろう。しかし鎬京に移る前にはこのような儀禮、つまり殷系氏族を西周王朝の中に迎え入れる趣旨の儀禮が行なわれていなかったのかというと、そうではない。このような形に落ち

着く前段階の儀禮、言い換えれば原初形態ともいえるべき儀禮が金文に見られるのである。それが取りも直さず莽京での儀禮である。

二 莽京辟雍儀禮の特質

莽京關係の銘文を時期別に分類して讀解を進めていく。それぞれの銘文には原則として、釋文・書き下し文と、更に内容の理解を助けるために私なりに工夫を凝らした「譯讀」を加えた。その後「考釋」という項目を設けて、その中で銘文の讀みを深めたり、問題點を指摘したりすることにする。最後にテーマとの關係を想定した「特記事項」を附する。ただ、銘文は長短様々にあり、また本稿のテーマとの關係からすればあまり重要度の高くないものもあるので、その場合は釋文と書き下し文だけにしたこともある。金文の解釋については『金文通釋』⁽¹⁾にほぼ全面的に負うところであるが、新出の青銅器もあり自分なりに掘り下げた點も少なくない。

餘計なお世話になるが、金文は専門家でも十分に讀みこなしくいものなので、一般の讀者は先ずは「譯讀」と「考釋」を参考にして讀み進めて頂ければ、全體の趣旨が理解しやすいかと思う。

(注) 銘文に附した番號は左記の集録本の番號を記した。本文の字形は必ずしも合わせていない。『金文通釈』の番號はそれぞれ
の後に「通釈二六＊」のように記した。

集成Ⅱ中國社會科學院考古研究所編『殷周金文集成』(中華書局)

近出Ⅱ劉雨・盧岩編著『近出殷周金文集録』(中華書局)

近出Ⅱ劉雨・嚴志斌編著『近出殷周金文集録第二編』(中華

書局）

A 前期……「葦京」

「成周の地で殷の大祭を行なえ」という命令を、王が葦京で發した」

①小臣傳殷 集成4206 「通釈二六＊」 殷系氏族

佳五月既望甲子、王才葦京、令師田父殷成周（「年」、師田父令小臣傳非余、傳□□朕考[㊦]、師田父令余□□□官、白剗父賞小臣傳□□、𠂔白休、用乍朕考日甲寶□

（佳五月既望甲子、王、葦京に在り。師田父に令して成周に殷せしむるの年。師田父、小臣傳に非余を令ふ。傳、朕が考の[㊦]に□□す。師田父、余に令して□□の官に□せしむ。伯剗父、小臣傳に□□を賞す。伯の休に揚へて、用て朕が考日甲の寶□を作る。）

【譯讀】

それは五月の第三週甲子の日に周王が葦京にて、師田父殿に命じて成周〔殷の餘民が集住する所〕において殷の大祭を執り行なわせた年のことであつた。その時、師田父殿は、小臣傳〔私〕の功績を稱えて簪の非余を賜與された。（小臣は殷において高い地位にあつた者を示す肩書きのようなもの）傳はこのことを、我らが亡父[㊦]に□□〔報告〕した。師田父殿は、余に令して□□の官に任命せられた。

また伯剗父殿は、小臣たる傳に褒賞として□□を授けられた。そこで伯剗父殿からの賜物□□に應え奉り、もつてわが亡父日甲の祭器を作つたのである。

【考釋】

五月の第三週甲子の日に葦京において周王の命を受けた師田父が、洛陽の成周に赴いて殷の大祭を行なつた年のことだとする。殷代においては高い地位を意味する小臣という稱號をもつ傳が、師田父を助け、殷系氏族〔庶殷〕の集住する成周において殷の大祭を行なう際に大いに貢献したのである。その功績を稱えて、師田父は小臣傳に非余を賜與した。その後、小臣傳はこのことを亡父の靈廟に報告した。師田父はさらに、小臣傳を□□の官に任命した。周の都である宗周から遠く離れた成周の地であるから、王命を受けた師田父が王の代理で小臣傳を任命したのである。その時小臣傳に任官の際の賜物を授けたのは伯剗父であつた。その賜物に應え奉り、小臣傳の亡父日甲を記念する祭器を作つたという次第。

文意がとりにくいので念のために書き加えると、成周における殷の大祭を行なうことを命じた場所が葦京で、その後洛陽の成周の地に赴いて殷の大祭を行なつたという次第になっている。その時王がどこにいたかは記されていないが、成周の地で賜物を與えたのは師田父や伯剗父であつて王ではなかつたことからすれば、おそらく成周の地には赴かなかつたのであろう。

師田父が擔當した成周の地で殷の大祭は、小臣傳の盡力もありつつがなく終えることができた。殷系氏族が集住する成周での殷の大祭には大勢の殷系氏族たちが列席したものと思われる。その大祭に貢獻した小臣傳に對する稱揚と賜與があり、小臣傳はそのことを亡父の靈廟〔成周にあつたのであろう〕に報告した。ここまでが殷の大祭に關することである。その時小臣傳に對する任官の式も行なわれたのであ

ろう。その時の賜物を與えたのは伯剗父であった。小臣傳という名とその亡父の名が日甲となっており、ことから殷系氏族であることが分かるが、小臣傳は、現地の成周では大祭の主宰者のような役割を果たしたのかも知れない。

【特記事項】

- 1、作器者の小臣傳は殷系氏族。
- 2、「成周の地で殷の大祭を行なえ」という命令を、王は葦京で發した。
- 3、成周の地に赴いたのは師田父・小臣傳・伯剗父その他の者で、王は赴かなかった。
- 4、成周での殷の大祭には殷系氏族が挙って列席した。師田父が王の代理を務めたのである。

②士上卣 集成5421・5422 「通釈三〇」 殷系氏族

隹王大鬲于宗周、佶饗葦京年、才五月、既望辛酉、王令士上眾史寅、殷于成周、替百生甝、眾賞卣・鬯・貝、用乍父癸寶隣彝、臣辰册（隹王、大いに宗周に餽し、佶きて葦京に饗したまへる年。五月に在り、既望辛酉、王、士上と史寅とに令して、成周に殷せしむ。百姓に甝を替られ、眾び卣・鬯・貝を賞せらる。用て父癸の寶隣彝を作る。臣辰册）

【譯讀】

それは王が宗周にて和合を願う大いなる禴の祭祀を執り行ない、さらに葦京に赴いて饗の祭祀を執り行なった年のことであった。

時は五月の第三週辛酉の日のことである。王は士上と史寅とに、成周にて殷の大祭を執り行なうよう命じた。その殷の大祭に貢獻した全ての殷系氏族には豚が贈られた。また士上に對する褒賞としては、殷の祭祀に必ず用いるところの酒を容れる卣と、鬯（黑黍で作った酒）と、殷系氏族を表彰する時には必ず與えるところの貝とを賜與した。そのことを記念して士上は亡父癸の祭器を作ったのである。

【考釋】

宗周・葦京・成周という西周王朝の中心地で國家規模の祭祀儀禮を大々的に行なった時のことを記すものである。銘文の中心は成周で行なわれた殷の大祭のことであるが、それが行なわれた年は、宗周における大禴の祭儀が行なわれ、さらに宗周における大祭を引き繼ぐ形で葦京にも赴き饗の祭祀を行なった記念すべき年のことであるというのである。「佶」は「行きて」とも、「出でて」とも讀みうる語であるが、宗周と葦京とが必ずしも近距離にあったことを意味しない。最初に宗周での祭祀を行ない、その次に葦京での祭祀を行なったということが要諦である。そしてその同じ年に、成周での大祭も行なったという點に意味があるのである。この部分を讀んでいると《天亡殷》に記されたことを想起する。《天亡殷》ではまず周の祭祀である天室の祭祀を行ない、その後、殷の祖神の合祀である「衣祀」を行なったと記されている⁽¹²⁾。

成周での殷の大祭を掌ったのは何れも殷系氏族の士上と史寅である。名前からすると士上が軍事官、史寅が祭祀官のようにも思われるが、そこまで言えるかどうかは分からない。百生とは百姓のこと、

成周に住む殷系氏族の全てがこの大祭に列席したと記しているのである。今次の大祭の最大の意味はそこにある。

宗周では殷系氏族と周系氏族との和合を願う儀禮肅（竹笛を記した字形で音楽を中心とした祭祀ではないか）を大々的に行ない、次いで葦京では「饗」の祭祀を行なった。「饗」がどのような祭祀であるかは用例が少ない（他に《吕方鼎》に見えるだけ）ため、詳細を明らかにすることはできないが、字形から推測すれば、殷の祭祀に用いる酒器ではなく、西周王朝の祭祀の中心となる食器の殷（穀物を容れる器であろう）を用いた祭祀であり、そこに肉を加える様を描いている形姿になっているので、酒を用いない儀禮であったかも知れない。だが、この祭儀にも殷系氏族が列席しているのは改めて言うまでもない。

大祭の三番目は殷の祭祀である。場所は殷系氏族の集住する洛陽の成周で、この殷の祭祀を殷系氏族總出で行なった。

この一連の祭祀の次第を整理すると以下になる。

- 1、西周王朝の政治の中心にある宗周で、殷系氏族と周系氏族の和合を願う祭祀を実施。
- 2、葦京では周系的祭祀が行なわれたが、ここに殷系氏族も列席しているのである。
- 3、「成周の地で殷の大祭を行なえ」という命令を、王は葦京で發した。①小臣傳殷と同じ。
- 4、成周では、殷の祭祀を殷系氏族總出で大々的に行なった。①小臣傳殷と同じ。
- 5、殷系氏族と周系氏族とが習合するための一連の祭祀の次第を記

して、亡父癸の祭器を作った。

【特記事項】

- 1、作器者の士上は殷系氏族

【葦京の辟雍の池で行なわれた祭祀儀禮】

③麥方尊 集成6015 「通積六〇c」 殷系氏族

王令辟井侯出昃、侯于井、雫若二月、侯見于宗周、亡述、迨王客葦京彫祀、雫若翌日、才璧離、王乘于舟、爲大豐、王射大龔禽、侯乘于赤旂舟、從死威、

之日、王眚侯内于甯、侯易玄周戈、雫王才敗、已夕、侯易諸矧臣二百家、齋用王乘車馬・金□・冂衣・市・舄、

唯歸遲天子休、告亡尤、用彝義寧侯覲孝于井

侯乍册麥易金于辟侯、麥鬯用乍寶隣彝、用囑侯逆卣遲明令、唯天子休于麥辟侯之年、盟孫々子々、其永亡冬、冬用肅德、妥多友、高旒走令、

（王、辟たる邢侯に令し、昃を出でて、邢に侯たらしむ。雫若に二月、侯、宗周に見ゆるに尤亡し。王の葦京に格りて彫祀したまふに迨ふ。雫若に翌日、璧離に在り。王、舟に乗りて、大豐を爲したまふ。王射て大いに龔禽す。侯、赤旂舟に乗り、從ひて死ぬること成る。

この日、王、侯と寢に内る。侯、玄彫戈を賜はる。

雫に王、敗に在りて、已夕す。侯、諸矧臣二百家を賜はる。齋ふに、王の乘車馬・金□・冂衣・市・舄を用てす。

唯歸りて、天子の休に遲へて告したるに、尤亡し。用て龔みて侯

の邢に顯孝するを義寧せむ。

侯の作冊麥、金を辟侯より賜ふ。麥、揚へて用て寶隣彝を作る。用て侯の逆造に喝し、明令に逕へむ。唯天子、麥の辟侯に休せらるるの年なり。孫々子々に鹽ぶまで、其れ永く終ふること亡く、終に用て徳を造し、多友を綏んじ、享く令に奔走せむ。

【譯讀】

これまでは刃に封ぜられていた麥〔私〕の主君は、この度王命により邢の地の侯となられた。(ここでは邢侯という新しい呼稱が用いられている。邢侯は周公の子で征と呼ばれることもある) ことの次第は次に述べる。

二月のこと。最初に邢侯殿は宗周において王にまみえる見事の禮を執り、つつがなく終えることができた。その後、王が葦京に赴かれ、彤の祭祀(殷の祭祀)を行なわれた。またその翌日に王は(邢侯殿とともに)葦京の辟雍で舟に乗り、大豊の祭儀を執り行なわれた。その時の次第は、先ず王が自ら弓で獲物を射止められた。王に同行した邢侯殿は赤い旗を立てた(周の)舟に乗り、王の舟に従い連ねる辟雍の儀禮をつつがなく終えられた。

その日さらに、王は邢侯殿とともに寢殿に入り祭儀を行なわれた。一連の祭祀儀禮に奉仕した邢侯殿はその褒賞として玄彫戈を賜わった。さてその後、王は敗において夜の祭である「祀夕」を執り行なわれた。邢侯殿はその儀禮における助祭を顯彰され、武臣二百人を賜與された。その時の賜物は他に乘車馬・金□・同衣・黻・帛であった。さてしも邢侯殿は、宗周と葦京で行なわれた一連の祭祀儀禮が無事

に終わった後、洛陽の成周に歸って祖靈の御靈屋に、宗周及び葦京で行なわれた一連の祭祀儀禮のことと、天子からの賜物のことを報告した。祖靈もこのことをお咎めになることがなかった。かくて邢侯殿が邢の地に侯として赴任されることが顯彰されたことを祖靈も善しとされつつがなきを得たのである。

邢侯殿の作冊を務める麥〔私〕は、宗周に始まる一連の祭祀儀禮を主君邢侯殿とともに助祭したことを邢侯殿から顯彰され金〔銅〕を賜わった。麥はそれに應えてその銅を用いて祭器を作ったのである。この祭器は邢侯殿のお見えになる際の裸禮にも用い、賜わった恩恵にお應えするものである。

さてさてそれは、天の御子が麥の主君邢侯殿を表彰された年のことであった。孫々子々に及ぶまで永遠に榮え、天の御子のこの上ないお力を頂き、あまたの同朋の平安を守り、王の勅令によくいそしむのである。

(注) 邢侯は周公の子である井侯征である。周公の家には作冊麥が屬していた。文字のことを擔當する殷系氏族が屬していたことが分る。この時期としては例外に屬するか。

【考釋】

邢侯は周公旦の子・征のことであるから邢侯征ともいう。二月に邢侯は宗周にて王への見事の禮をつつがなく終えた。その後、王に隨行して葦京に赴き殷の祭祀である醢祀を行なった。¹³⁾ 殷系氏族の麥は邢侯の作冊として、宗周での祭儀から葦京での祭儀へと続く一連の祭祀儀禮の間ずっと邢侯に隨行し奉仕したということになる。

【特記事項】

- 1、作器者麥は邢侯の作冊で股系氏族。
- 2、葦京では股系氏族が周系氏族に融合できることを願って様々な祭祀儀禮が行なわれた。

〔その他〕

④奢毳 集成4088 「通釈七二d」 股系氏族

佳十月初吉辛子、公妣易奢貝、才葦京、用作父乙寶彝、其子孫永寶、（佳十月初吉辛巳、公妣、奢に貝を賜ふ。葦京に在り。用て父乙の寶彝を作る。其れ子孫永く寶とせよ。）

【訳読】

それは十月第一週の辛巳の日のことであった。公妣様は奢「私」に貝を賜わった。葦京のことである。そこで奢「私」はその記念として亡父乙の祭器を作ったのである。さて子孫たちよ末永くこれを祭器として用いよ。

【考釋】

十月初吉辛巳の日のこと。公妣が奢に貝を賜與。場所は葦京。その記念として亡父乙の祭器を作った。

【特記事項】

- 1、作器者の奢は股系氏族

⑤歸觚方鼎 集成2725～2726 股系氏族

佳八月辰才乙亥。王才葦京。王易歸觚進金。肆對𡈼王休。用作父

辛寶簋。𡈼。

（佳八月、辰は乙亥に在り。王、葦京に在り。王、歸觚進に金を賜ふ。肆にも、王の休に對揚して、用て父辛の寶簋を作る。𡈼。）

【譯讀】

八月の乙亥の日、王は葦京にあらせられ、歸觚進に金を賜與された。王の賜物に應えて亡父辛の祭器を作ったのである。

【考釋】

最後の圖象記號（族徽）𡈼は《厚趙方鼎》2730にも見え、父辛の祭器を作っている。股系氏族で同族の可能性がある。王に稱揚された理由は明記されていない。

【特記事項】

- 1、作器者は股系氏族である。

⑥戒鬲 集成566

戒乍葦官明隤彝（戒、葦官の明隤彝を作る）

【考釋】

葦官とあるが意味は不詳。文字の歴史から見れば官は後に館となるが、祭器を作る場合には「父乙隤彝」というように人名が記されるのが普通であり、「葦官明隤彝」という例はない。

⑦王孟圈足 近出1024

王乍葦京中霱帶孟。（王、葦京の中霱の帶孟を作る。）（注）帶は

假字

【特記事項】

1、葦京には中寢という宮廟があった。

【葦京関係銘文前期の小整理】

前期の葦京関係の銘文から分かることは次の四点である。

- 1、作器者は基本的に殷系氏族である。
- 2、周王が、殷系氏族が集住する成周で殷の大祭を行なうよう命令を發している。
- 3、殷の大祭を行なうよう王が命令を發する場所は葦京である。

4、宗周・葦京・成周と続く一連の祭儀には、殷系氏族と周系氏族とが和合することを願う趣旨があるが、葦京は兩系統の氏族が宗周と成周とを繋ぐ接點の役割を果たしていたのではあるまいか。

【補論】

冒頭でも言及した《天亡殷》についてここでも再度言及しておきたい。《天亡殷》に記された祭儀の内容は、先ず天室にて西周王朝の祭祀である「天」の祭儀を行ない、その後、殷の祭儀である「衣祀」を行なった。《天亡殷》だけを讀んでいると、西周王朝内で周王が殷の祭祀である「衣祀」を行なった意味が分からないが、西周前期の葦京関係の銘文をまとめて讀むと、《天亡殷》に記された祭儀も同じ趣旨で行なわれたのであらうことに思い至るのである。

もう一点、述べておきたいことがある。それは《天亡殷》の出土地のことである。出土地は岐山縣ということだけが分かっている、それ

以上具體的なことは分からないとのことであるが、《毛公鼎》と同じ所から出土したようであるから、それは岐山縣に屬する周公廟遺址から出たのではないかという推測を前稿「《天亡殷》私考」ではしておいた。今回葦京関係の銘文を整理して讀んでみて、その可能性は高いのではないかと改めて思うのである。後節で葦京の比定地について私見を述べる時に《毛公鼎》にも言及するので、その時にも再度述べることにしたい。

B 中期前半……「葦京」

〔葦京の池における漁の祭儀〕

⑧通殷 集成4207 「通釈八五」 穆王期 殷系氏族

佳六月既生霸、穆王才葦京、呼漚于大池、王郷酉、適御亡遣、穆王親易適壁、適拜首領首、敢對𠄎穆王休、用乍文考父乙隣彝、其孫々々永寶

（佳六月既生霸、穆王、葦京に在り。（呼びて）大池に漁せしむ。王、饗酒す。適、御して謹亡し、穆王、親しく適に壁を賜ふ。適、拜首稽首し、敢て穆王の休に對揚して、用て文考父乙の隣彝を作る。其れ孫々子々永く寶とせよ。）

【譯讀】

それは六月の第二週のことであった。穆王は葦京にあらせられ、辟雍の大池で「漁」の祭儀を催された。次いで王は酒を用いた饗宴を催された。適「私」はその中で「御」を掌りつつがなく務めることができたのである。穆王の覚えめでたく適「私」に王自ら壁を賜與された。

適〔私〕は儀禮作法に従い額ずいて拜受した。穆王から頂いた賜物に敬んで應え、榮えある亡父乙の祭器を作るのである。さあ孫々子々よ、この祭器を用いて末永く祖祭を行なえ。

【考釋】

「穆王」呼喚于大池」の訓讀を「呼んで大池に漁せしむ」としたのは「呼」を「呼ぶ」と讀む訓讀上の慣習に従ったからだだが、この時代が口頭言語の時代であることをよく物語る場面になっていることが分かる。ただ、意味を伝えるための訓讀としては「大池に漁せしむ」としても差し支えはない。

漁の祭禮の後は饗宴が催され、適は御を掌ったとあるが、一連の祭禮の過程でのことであるから、神を招ぎ降ろして迎え邪惡を防ぐ儀禮を擔掌したと思われる。その適に對して穆王自ら賜物を與えた。「親」は「親しく」と訓讀しても、「みずから」と訓讀してもその意味に大きな違いはないが、王が直接賜物を與えると記す金文の例は多くはない。その漁の祭禮がよほど楽しいものであったのかも知れない。

【特記事項】

- 1、作器者の適は股系氏族
- 2、葦京辟雍の大池における「漁」の祭儀。穆王がこれを催し、股系氏族の適が祭儀の中で貢獻し表彰された。

⑨井鼎 集成2720 【通釈八六】

佳七月、王才葦京、辛卯、王魚于寔池、乎井從魚、攸易魚、對覲王休、用乍寶隣鼎、

（佳七月、王、葦京に在り。辛卯、王、寔池に漁す。邢を呼びて從ひて漁せしむ。攸て魚を賜ふ。王の休に對揚して、用て寶隣鼎を作る。）

【譯讀】

それは七月のこと。王は葦京にあらせられた。辛卯の日、王は辟雍の寔池で「漁」の祭儀を催され、邢〔私〕に「漁」の祭儀を命じられたのである。その功を稱揚され、寔池で獲た魚を邢〔私〕に賜與された。このような次第で邢〔私〕は王の賜物に應え鼎（祭器）を作ったのである。

【考釋】

邢は周公一族の邢侯（公）だが、葦京の寔池での「漁」の祭儀を擔當した。《通説》では大池で行なわれた。大池と寔池とは別の池のようだが、このような池がいくつもあったのであろう。また葦京の辟雍での祭儀には股系氏族が關わることが多いが、ここでは周公一族の邢侯が關わっている。他に股系氏族も奉仕していたのであろうが、ここに一々記されない。なおいずれ改めて整理する機會をもちたいが、周公一族は股系氏族との血縁が深いことが段々分かってきた。多分恩師白川靜も氣付いていたのではないかと思うのだが、それを具體的な問題として整理することはされなかった。これも「金文通釋」を精讀していて氣付いたことである。周公一族が葦京辟雍儀禮にも關わる人が多いのはそのような背景があるからではないかと推測している。

【特記事項】

- 1、作器者の邢は周公一族
- 2、葦京辟雍の池で漁の祭儀を行なった。

⑩老殷 近出二426 殷系氏族

佳五月初吉、王才葦京、魚于大濩、王蔑老曆、易魚百、老拜頤首、皇凱王休、用乍且乙隣彝、其萬年用夙夜于宗。

(佳五月初吉、王、葦京に在り。大濩に漁す。王、老の曆を蔑はし、魚百を賜ふ。老拜して稽首し、王の休に皇揚して、用て祖乙の隣彝を作る。其れ萬年まで用て宗に夙夜せよ)

【譯讀】

それは五月の第一週のことであつた。王は葦京にあらせられ、大濩にて「漁」の祭儀を行なわれた。王は、祭儀に奉仕した老「私」を稱揚され、魚を百匹賜與された。老「私」は儀禮作法に従つて額ずき拜受した。そして王からの賜物に應えて、わが祖父乙の祭器を作つたのである。さてこの祭器を用いて末永く永遠に、わが御靈屋で祭祀儀禮をおこなおうぞ。

【考釋】

葦京の大濩で行なわれ「漁」の祭儀に殷系氏族の老がよく働いたことを顯彰されたことを記念して作られた祭器である。賜物が魚百尾と記される例は珍しい。《井鼎》では數を記していない。「祖乙」の祭器を作つたと記されているところから老が殷系氏族であることが分かる。

【特記事項】

- 1、作器者の老は殷系氏族
- 2、葦京の大濩で行なわれた「漁」の祭儀に殷系氏族の老が奉仕した。

「小臣靜の三器。大池で行なわれた競射に関するもの」

⑪靜卣 集成5408 「通釈八四a」 穆王期 殷系氏族

佳四月初吉丙寅、王才葦京、王易靜弓、靜拜頤首、敢對凱王休、用乍宗彝、其子々孫々永寶用、

(佳四月初吉丙寅、王、葦京に在り。王、靜に弓を賜ふ。靜、拜して稽首し、敢て王の休に對揚して、用て宗彝を作る。其れ子々孫々永く寶用せよ。)

【譯讀】

それは四月の第一週丙寅の日のことであつた。王は葦京にあらせられて、靜「私」に弓を賜與された。靜「私」は儀禮作法に従い額ずいて拜受した。王の賜物に嚴肅に應え、記念の宗彝器を作つた。子々孫々よこの祭器を用いて末永くわれらが一族の祖祭を行なえ。

【考釋】

葦京で王が靜に弓を與えたのが四月初吉丙寅というのは、⑫《靜殷》に記された六月の初吉に小臣靜が葦京の學宮の射の指導者に任ぜられる二ヶ月前のことなのかどうか。そして八月には競射が行なわれていたとのことである。それに先立って弓を與えたということなのか。箇條書きしてみると次のようになる。

四月に葦京で弓を賜與した。《靜卣》

六月に葦京辟雍の學宮で射の指導者に任命された。《靜殷》

八月に葦京辟雍の大池で競射が行なわれた。《靜卣》

このように並べてみると時系列としてはこの流れが自然に見えるが、それはあくまで同じ年の出來事だと前提してのことであり、翌年

の四月でないと断定できる材料があるわけではない。なお、器種としては由が盛酒器、殷が盛食器である。

【特記事項】

1、作器者の小臣靜は股系氏族。

⑫靜殷 集成4273 「通釈八四」 穆王期 股系氏族

佳六月初吉、王才葦京、丁卯、王令靜嗣射學宮、小子眾服眾小臣眾夷僕、學射、

季八月初吉庚寅、王呂吳^木、呂^𠂔、御^𠂔盞盞自邦君、射于大池、靜學無^𠂔、王易靜鞞^𠂔、

靜敢拜頤首、對^𠂔天子不顯休、用^𠂔文母外姑^𠂔、子々孫々其萬年用

（佳六月初吉、王、葦京に在り。丁卯、王、靜に令して、射を學宮に嗣^{つかさど}らしむ。小子と服と、小臣と夷僕と、射を學^{なら}ふ。

季に八月初吉庚寅、王、吳垂・呂^𠂔を以て、^𠂔盞盞の師邦君と^𠂔、大池に射る。靜、學^をへて^𠂔、^𠂔無^𠂔。王、靜に鞞^𠂔を賜ふ。

靜、敢て拜して稽首し、天子の不顯なる休に對揚し、用て文母外姑の隣^𠂔を作る。子々孫々、其れ萬年まで用ひよ。）

【譯讀】

それは六月の第一週のことであった。王は葦京にあらせられた。丁卯の日、王は靜〔私〕に學宮での射の指導を命ぜられた。その相手は小子・服・小臣・夷僕（何れも股系氏族）である。

さて競射當日の次第は次の通りであった。八月第一週の庚寅の日、

王が、吳垂と呂^𠂔を引き連れて、^𠂔盞盞の師邦君を相手に大池での競射を催された。その時靜〔私〕は競射の進行を仰せつかり大過なく終えることができた。そのことを稱揚して王は靜〔私〕に玉の鞞^𠂔を賜与された。

靜は儀禮作法に従って深く頭を垂れ、天の御子からありがたくも神々しい賜物を頂いた。その賜物に應えて、亡母外姑を記念する祭器を作ったのである。子々孫々よ、萬年の永きにいたるまで末永くこの祭器を用いて祖祭を行なえ。

【考釋】

八月の第一週庚寅の日に葦京辟雍の大池で競射が行なわれるのだが、それに先立つこと二ヶ月の六月第一週丁卯の日に、小臣靜が葦京の學宮の射の指導者に任ぜられる。指導を受けるのは小子と服と小臣と夷僕とであった。名前を具體的に記されないが、小子と小臣とは殷では王子・王孫系統の高い身分にあった者たちである。

競射當日の八月第一週庚寅の日、王は、吳垂と呂^𠂔を引き連れて、^𠂔盞盞の師邦君との競射を催した。場所は葦京辟雍の大池であった。王が引き連れた吳垂と呂^𠂔とは、それぞれ毛父（周公一族）を左右から輔佐するよう命ぜられた經緯のある吳と呂の家筋の者で、當人たちが自身であったかも知れない。いずれにしても周公一族の毛公の家と關係の深い者たちと見られる。一方^𠂔盞盞の師邦君の^𠂔とは周の故地のこと、軍事に攜わるものであろう。その兩者の競射は大變盛り上がったよう、成功裏に終わった。競射の進行を掌った靜も安堵したであろう。王は靜の功を稱揚し玉の鞞^𠂔を賜與した。靜は天の御子たる王の

不顯なる賜物に應えて、亡母外姑を記念する祭器を作ったという次第を記したものである。

【特記事項】

- 1、作器者の靜（小臣）は股系氏族。
- 2、周王の主宰する辟雍大池での競射において、小臣靜は進行役という大任を果たした。

⑬小臣靜臣 近出二547 「通釈八四b」 股系氏族

隹十又三月、王客葦京、小臣靜卽事、王易貝五十朋、飢天子休、用乍父丁寶隣彝、
（隹十又三月、王、葦京に格る。小臣靜、事「使」に即く。王、貝五十朋を賜ふ。天子の休に揚へて、用て父丁の寶隣彝を作る）

【訳読】

それは十三月のことであった。王は葦京に赴かれた。その葦京で、殷以来の身分である小臣の靜（私）は祭事のことを掌った。その時王は五十朋もの貝を賜与された。王すなわち天の御子からの賜物に応え、亡父を記念する祭器を作ったのである。

【考釋】

「事」字は「使」字でもあり、本来の用例からするとむしろ「使」とすべきかも知れないのだが、「卽事」と「卽使」の何れにしても他に例のない語で限定しにくいところ。ここでは一應「卽事」と捉えておいた。何らかの祭事を掌ったという捉え方である。もしもそうだとすれば、⑫靜殷の銘文に記されたように靜は射の指導者として任命さ

れており、競射という重要な祭事を掌った例があるのだから、ここでも競射という祭事を掌ったということになる。五十朋もの貝を賜與されていることを勘案すると、その任務が非常に重要なものと見なされたということである。他に貝百朋という例が《伯姜鼎》に見えるのが数としては最大である。《伯姜鼎》の場合には、辟雍の涇宮での祭儀において伯姜がよく奉仕したことに對して與えられたものである。貝を賜與される数としてはそれに次ぐ多さということになる。

また「卽使」と捉えた場合には、「使」は使者として何れかの地に赴き、王の代理で王言を伝えるという任務を掌るということになる。この銘文にはどこに赴くとも記されていないが、貝百朋という類例のない数の賜物であることも勘案するとその可能性は十分にある。金文の場合、詳細が記されないことが多く、赴く先が省略された可能性も否定しきれない。

【特記事項】

- 1、作器者の小臣靜は股系氏族。
- 2、この時代は十三月という閏月があった。特に珍しいわけではないが一應記しておく。

【小臣靜の三器から分かること】

殷代では身分の高かった小臣という呼稱をもつ靜が、葦京の學宮の射の指導者に任命され、競射という重要な祭儀を掌っているということ。股系氏族が西周王朝の中でそのような重要な任務に即いていたということである。それが葦京という場所での祭儀であったということ。

〔昭王の祭祀〕

⑭鮮盤（殷） 集成10166 股系氏族

隹王卅又四祀、唯五月既望戊午、王才葦京、啗于琯王。鮮蔑曆。鄩（裸）王軫。鄩（裸）玉三品。貝廿朋。對王休。用乍子孫其永寶。
（隹王の卅又四祀、唯五月既望戊午、王、葦京に在り。鄩王に禘す。鮮蔑曆せらる。〔休は〕裸王軫・裸玉三品・貝廿朋なり。王の休に對へて、用て作る。子孫を其れ永く寶とせよ。）

【譯讀】

それは王の三十四祀のことであつた。しかもそれは五月の第三週戊午の日のことであつた。王は葦京にあらせられ、今は亡き昭王の祭祀を行なわれた。鮮〔私〕は祭儀において功あつたとして稱揚された。賜物は裸王軫・裸玉三品・貝廿朋であつた。王から頂いた賜物に應えて（この祭器を）作つたのである。子孫は末永くこれを祭器として祖祭を行なえ。

【考釋】

王の三十四祀という紀年形式は殷式である。作者の鮮が股系氏族であることの徴標である。ただ殷の紀年の場合は末尾に記され、西周の場合は冒頭に記されるのであるからその意味では周的でもある。またもう一點、これも珍しい修辭であるが、冒頭で「隹」という文頭詞（發語詞）が用いられた年號が述べられた直ぐ後に、また改めて「唯五月既望戊午」と述べる。發語詞が入ると文節が切られ改めて言を起こすので、嚴肅で重々しい感じが出るのであろう。そして、今は亡き昭王の祭祀を行なつたことが述べられる。ここは白川靜の説である「卜

辭では上帝や祖先神、また金文では直系の先王を祀るときに禘という」〔字通〕に依つた。この青銅器が穆王期のものであることがはっきりする。他にも「易○○」という修辭がないことや「用作」とだけ記して、祖考の祭器であることを記さないなど、簡略で省略の多い文である。

【特記事項】

- 1、作者の鮮は股系氏族。
- 2、葦京で昭王の祭祀が行なわれた。股系氏族の鮮はその祭祀において助祭した。
- 3、殷の紀年形式を冒頭にもつてくることや、「隹」と「唯」を連続的に用いるなど異例の修辭が見られる。

〔涇宮で行なわれた祭儀〕

⑮伯姜鼎 集成2791 股系氏族

隹正月既生霸庚申、王才葦京涇宮、天子冢宜白姜、易貝百朋、白姜對凱天子休、用乍寶隣彝、用夙夜明高于邵白日庚、天子萬年、世孫々子々受厥屯魯、白姜日受天子魯休

（隹正月既生霸庚申、王、葦京の涇宮に在り、天子、伯姜に冢宜して、貝百朋を賜ふ。伯姜、天子の休に對揚して、用て寶隣彝を作る。用て夙夜して邵白日庚に明享す。天子の萬年ならんことを。世孫々子々、厥の純魯を受け、伯姜日に天子の魯休を受けむ。）

【譯讀】

それは正月第二週の庚申の日のことであつた。王は葦京の涇宮にあ

らせられた。王は天の御子として、涇宮での祭儀に奉仕した伯姜を稱揚し、貝百朋を賜與された。伯姜は天子の賜物に應えて祭器を作ったのである。この祭器を用いて祭儀を行ない、わが祖先の邵伯日庚を偲ぶのである。天の御子が萬年に至るまで健やかであらせられますようお願いいたします。世々代々、孫も子も、天子さまのたいなる福を授けられますように。伯姜は日々天子のたいなる恵みを頂いております。

【考釋】

正月の第二週庚申の日に葦京の涇宮で伯姜に對する表彰式があった。王が涇宮という宮廟にあり、その後の表彰であるから、おそらく涇宮での祭儀において伯姜がよく奉仕したという表彰であろう。伯姜は邵伯日庚という名の祖先をもつ殷系氏族である。邵伯の名をもつ者には他に召公奭の祖考である邵伯父辛があり、その縁戚の者である可能性がある。殷系氏族への賜物の最たるものは貝であるが、その伯姜への賜物が貝百朋というのは比類のない大きな数である。このようなことを勘案しても、西周王朝の草創期に大きく貢献した召公の家に比定できる條件を十分具えている。「天子萬年」という珍しい表現。周王の長壽を祈る言葉ではあるが、むしろ天の御子としての王の御代すなわち天子の力による秩序が永遠に続くことを祈る言葉と解すべきであらう。伯姜の言葉は祖祭が行なれる度に唱えられ子々孫々にいたるまで受け継がれるのである。

【特記事項】

- 1、作器者の伯姜は殷系氏族。
- 2、葦京の涇宮で行なわれた周王主宰の祭儀において殷系氏族の伯

姜がよく奉仕した。

⑩史懋壺 集成9714 「通釈一一七」 共王期 殷系氏族

佳八月既死霸戊寅、王才葦京涇宮、窺令史懋路筭、咸、王乎伊白、易懋貝、懋拜頤首、對王休、用乍父丁寶壺

（佳八月既死霸戊寅、王、葦京の涇宮に在り。親しく史懋に路筭を令す。咸^を。王、伊白を呼び、懋に貝を賜はしむ。懋、拜して稽首し、王の休^{たまものこと}に對へて、用て父丁の寶壺を作る。）

【譯讀】

それは八月第四週の戊寅の日であった。王は葦京の涇宮にあらせられ、王自ら史懋「私」に路筭を命ぜられた。そして路筭をつつがなく終えることができたのである。次いで王は伊伯を呼び（伊伯を介して）懋「私」に貝を賜與された。懋「私」は儀禮作法に従って頤ずき拜受した。そして王の賜物に應えて、亡父丁の寶壺を作ったのである。

【考釈】

八月既死霸戊寅の日。王は葦京の涇宮にあって、自ら殷系氏族の史懋に路筭（占卜の一種）を命ぜられ、路筭を恙なく終えることができたのである。

次いで王は伊伯を呼び（伊伯を介して）懋「私」に貝を賜與した。史懋は王の賜物に應えて、亡父丁を記念する祭器を作ったという次第である。

先ず注目すべき点は、ここでも王自ら史懋に命令を發したり、あるいは伊伯を呼んだりして直接関わっている点である。この時期の辟雍

儀禮には王が直接關わる人が多いと解釋してもよさそうである。

涇宮で行なわれた占卜の一種である路筮については、白川靜『金文通釋』（第二輯 四八九頁）に興味深い考證があるので参考に供しておく。『左傳』や『國語』にみえる占卜を「史」が擔掌していたという點が私にとっては特に興味深い。それは、王命を傳える仕事としての「史」が占卜を行なっていたということを物語るわけであり、それがわが國の古代において、王と臣下との間に介在する中臣がもとは占卜を行なっていたという傳承ともつながるからである。本稿のテーマとは直接關係はないが、「史」の本義を考える時の一つの材料になるからであり、そしてそれはこの時代にはまだ歴史の記錄官といふほどの任務についていたわけではないという捉え方を裏付ける資料にもなるからである。

葦京は周の神都として、そこに明堂辟雍があり、神事的な古儀を行なう諸宮があった。蠶室は後に死罪繫囚のところでされたが、本來は神衣を織る織女を隔離する齋服殿であり、本器にいう涇宮はおそらくそういうところであろう。祭義によると、蠶室のことが開始される際、天子自ら皮弁素積して涇み、三宮の婦人・世婦の吉者を卜したという。卜と筮とは關聯するもので、周禮占人は占龜のことを掌るものであるが、「以八筮占八頌」とあり、筮人にも「凡國之大事、先筮而後卜、上春相筮、凡國事共筮」とみえている。卜筮は古く史がこれを掌り、左傳・國語にみえる占卜は多く史の行なうところであつた。史官執筮はその本來の職事であ

る。

以上によつて考えると、涇宮はおそらく後の蠶室にあたる齋服殿であり、水涯の地に設けられ、神事に用いる養蠶職衣のことを行なつたところである。この器銘では、王が親しくその宮に涇み、史懋をして路筮せしめ、蠶室に奉仕すべき織女、あるいは祭祀に奉仕すべき夫人・世婦を占筮させたのであろう。史懋は史官としてのその職事にあるものであるからその古儀に奉仕し、無事にその任を終え、かくて下文にいう賜貝をえているのである。もし以上のように解しうるならば、祭義にいう蠶室儀禮の古儀を傳える、貴重な資料ということになる。

【特記事項】

- 1、作器者の史懋は股系氏族。
- 2、王の主宰する葦京涇宮における祭儀において、股系氏族の史懋が重要な役を果たした。

①伯唐父鼎 近出356 西周前・中期 陝西省長安縣張家坡M183・5

拓本では缺損した文字が多いため採用を躊躇するが、「伯唐父鼎・孟員鼎・甌銘文釋文」の著者（張政烺氏）は青銅器の實物を見ているのであろうか、あまり迷うことなく釋文しているように見える。興味深い内容なので一應葦京關係銘文として讀んでおく。¹⁴

乙卯、王饗葦京、王奉辟舟、臨舟龍、咸奉。白唐父告備。王各、乘辟舟、臨奉白旂、用射綏・矜虎・貉・白鹿・白狼于辟池、咸奉。王蔑曆、

易矩鬯一亩・貝廿朋。對揚王休、乍安公寶隣彝。

(乙卯、王、荃京に饗す。王、辟舟に奉る。舟龍に臨む。咸く奉る。伯唐父、備はれるを告ぐ。王、格りて辟舟に乗る。臨みて白旂に奉る。用て綯・釐虎・貉・白鹿・白狼を辟池に射る。咸く奉る。王、蔑曆し、矩鬯一亩・貝廿朋を賜ふ。王の休に對揚して、安公の寶隣彝を作る。)

【譯讀】

乙卯の日、王は荃京で賓の祭祀を催した。王は辟舟に乗るに當って、(辟雍における)射儀をつつがなく終えることができるよう祈った。またその舟の龍が降臨する姿(目の前に現われる姿)に祈りを捧げた。射儀の全ての前祭を終えた。伯唐父も(辟池で行なう)射儀の準備ができたことを王に告げた。王は辟雍の辟池に赴き辟舟に乗り、(股系氏族の)舟に立てられた白い旗を仰ぎ見て、股系氏族の射儀も首尾よく行なわれるようにと(その様子を目の前に浮かべつつ)祈りを捧げた。こうして辟池での射儀が始まり、綯・釐虎・貉・白鹿・白狼など多くの獲物を射止めることができた。以上のように豫定された全ての祭儀をつつがなく終えることができたのである。王は、祭儀の責任者として重責を果たした伯唐父を顯彰し、矩鬯一亩と貝二十朋を賜與した。王からの賜物に應えて、祖考の安公の祭器を作り、記念としたのである。

【考釋】

字形を確認できない文字が多いが、「近出」や張政烺氏の釋文に従い暫定的な解釋として記しておく。文章の特徴としては「奉」が多用されていることである。この「奉」は卜辭では「奉年」や「奉雨」の

ように自然の恵みを祈るの意に用いられ、金文でも「用奉壽、句永福」⁽¹⁵⁾「用奉壽、句永令」のように用いられ、やはり吉事のかなわんことを祈る意味に用いられる語である。日本の豫祝という語の用法に近いようである。ここでは祭儀がつつがなく終えられるよう祈る意味と見てよいだろう。だがこのように祭儀の一節毎に繰り返される用例は珍しく、祭儀の重々しさが伝わってくるが、本来の姿を傳えているかも知れない。舟の龍の件など私の想像を加えたものだが、もしも本當に「龍」字ならばさほどの外れではないような氣がする。辟雍には様々な池があったのであろうから、辟池が大池とは別の池なのかどうかということも考えてみるのだが、今は表記通りに受けとめておく。

「白旂」を股系氏族の舟に立てた旗と見たのは、③《麥方尊》に周の「赤旂舟」が見えていたからで、周人が赤を貴び、股人が白を貴ぶという文化的な差異が意識されている箇所だと讀んだわけである。文章に直接現われない股人たちの姿がそこに見えてくる。ここにも周人と股人とは祭儀の場に共在している様子が讀み取れるであろう。

獲物の名前については釋文者の表記に従ったままで、詳細不明としておきたい。

作器者のことに移る。王から顯彰されたことを記す文にも、王の賜物に應える文にも、人名が記されていない例外的な文なので、作器者を特定しにくいのが、「白唐父告備」から、伯唐父が祭儀の責任者であることが分かる。そして賜物が矩鬯と貝であるから作器者の伯唐父は股系氏族ということになる。また同じ墓から「父己」の銘をもつ《父己爵》も出土しており、墓主が股系氏族であることは疑いが無い。

ただこのような斷定に一抹の不安が過ぎるのは、『伯唐父鼎』の出土したのが張家坡の西周墓地のM一八三と呼ばれる墓であり、それが井（邢）叔氏一族の墓地と見なされている大規模な墓地の中に位置しているという點である。邢叔の墓にもかなり近い位置にあり縁戚關係としても近いと見るのが自然であろう。殷系氏族でありながら邢叔とも縁戚關係にあった人物ということになるが、その邢叔は葦京關係の金文にもその名が見える周公一族の一つであるということ（⑲弭叔殷）。隨處に言及していることだが、周公一族と殷系氏族との血緣關係をここでも想定せざるをえないのである。

青銅器の斷代を西周前期・中期としているのは、墓葬の年代を穆王前期頃と推定したことに基づくもの¹⁶⁾。

【葦京關係銘文西周中期前半の小整理】

中期前半の葦京關係の銘文から分かることは次の三點である。

- 1、⑨《井鼎》を除いて、作器者は全て殷系氏族であるが、井鼎の作器者が周公一族の邢公であることに注目すべきであろう。
- 2、葦京で行なわれた儀禮
 - ・大池や大濤・宴池の「漁」の祭儀（適殷・老殷・井鼎）
 - ・大池・辟池での射儀（小臣靜の三器・伯唐父鼎）
 - ・涇宮での祭儀（伯姜鼎・史櫟壺）
 - ・昭王の祭祀
- 3、周王が主宰したすべてに近い祭儀において殷系氏族がそれぞれ奉仕した。

【付論】葦京辟雍儀禮と周頌儀禮詩との關係について

いわゆる葦京辟雍儀禮と呼ばれるものはこの時期までである。この後、葦京の果していた役割は鎬京に移り、鎬京では儀禮詩として展開される。つまりそれまで葦京で實際に繰り広げられていた殷人と周人との共在する儀禮の様子が、古代歌謠そのものとなって歌われる段階に入るのである。儀禮の様は簡潔な詩の形式に則ってシンボリックに凝縮されて歌われるようになる。別の言い方をすれば、「殷系氏族を迎え入れるという考え方」が儀禮の形で實際に展開されていた段階から、一步進んで詩の形に結實し、廟歌として歌われる段階に入ることである。ここまで進んで来ると、殷系氏族が西周王朝の中に定着する段階に入ったと見てよいのではあるまいか。私が以前「殷系の氏族たちが周王朝に参畫することを論理化した」と書いたのはこのような意味を含めてのことである。

【註】

(1) 古くは、王國維「周葦京考」、唐蘭「葦京新考」などがあり、比較的近年では廬連成「西周金文所見葦京及相關都邑討論」や佐藤信彌「西周期における葦京の位相」（後に『西周期における祭祀儀禮の研究』朋友書店刊に收録）があるが、読んでいただければ分かるように、金文の読み方と問題意識があまりにも違うため言及のしようがなかった。葦京辟雍儀禮を正面切って論じること自体が容易なことではないが、先ずは白川靜の『金文通釋』や『詩經研究通論篇』を十分に咀嚼した上で、掘り下げてゆくしか深めようがないのではあるまいか。

(2) 「立命館白川靜記念東洋文字文化研究所紀要」第七號「《天亡殷》私考」（二〇一三年）、同八號「西周前期における王姜の役割」（二〇一四年）、同九・十號「西周時代における天の思想と天子概念」上・下（二〇一六年、

(二) 一〇一七年、同十一號「冊令(命)形式金文の歴史の意味」(二〇一八年)。

(3) 『詩經研究通論篇』(朋友書店 一九八一年) 三三七～三六三頁。『白川靜著作集』10 詩經Ⅱ(平凡社二〇〇〇年) 三四三～三六八頁。

(4) 「立命館白川靜記念東洋文字文化研究所紀要」第七號(二〇一三年) 所収「天亡殷」私考」八頁。

(5) 『詩經研究通論篇』は前掲。『詩經雅頌2』(平凡社東洋文庫 一九九八年)。

(6) 『金文通釋』(白鶴美術館)。

(7) より大規模な編鐘と考えられるもののうち、時期が最も早いと思われるのは、一九七六年一月一日、陝西省扶風縣法門公社莊白一號西周坑で出土した《癸鐘》と呼ばれる編鐘のうち、三式と假稱される六件一組のものである。これは懿王・孝王期頃と考えられるが、林巳奈夫氏の形態學的な分期ではⅢA(後期前半)とされているので、ここでは斷定を避けた。ただこれを音階樂器として使えたとは思われない。

(8) 『詩經研究通論篇』前掲。

(9) 『詩經研究通論篇』(朋友書店版) 三五五頁。著作集10 詩經Ⅱ(平凡社版) 三六〇頁。

(10) 高島敏夫『西周王朝論《話體版》』(朋友書店二〇一七年) 第十四章「五股の祖神と周の祖神との習合——周頌三篇「振鷺」「有瞽」「有客」二〇四頁。

(11) 一九九三年一月二六日付の「人民日報海外版」に、「千古懸案如今找到答案」(千古の懸案の答案が今やっと見つかった)として、「西周都城鎬京」の位置や規模・建物配置・時期について簡単な説明を加えている。時期としては、「從出土陶質器物分析、屬西周中期偏晚」ということであるから、懿王期あたりに比定するのが妥當であろう。白川が、詩篇と金文の読みから析出した遷都の時期が、考古學によって立證されつつあるといえる。

(12) 『金文通釋』(白鶴美術館誌)。後に『白川靜著作集別卷』(平凡社)。本稿では冊子の「白鶴美術館誌」に依った。

(13) 『天亡殷』私考」前掲。

(14) 酃祀は彫日のことで、「酃は祭の翌日に行われるあとの祭のことで、ト辭にその名がみえる。」「(字統)」という白川説に従えば殷の祭祀の一つである。「五祀周祭の一つ」でもある。

(15) 中國社會科學院考古研究所編著『張家坡西周墓地』(中國大百科全書出版社 一九九九年)。「考古」(一九八九年第六期) 所収の中國社會科學院考古研究所遺西發掘隊「長安張家坡 M 一八三西周洞室墓發掘簡報」。同前所収の張政娘「伯唐父鼎・孟員鼎・甗銘文釋文」も参照したが、解釋は私見によった。「考古」(一九九〇年第八期) 所収の劉桓「也談伯唐父鼎銘文

的釋讀——兼談殷代祭祀的一個問題」にも興味深い考察があるが、拙論と直接關係がないのでここでは觸れないでおく。

(16) 「用奉壽、句永福」(衛鼎)、「用奉壽、句永令」(杜伯簋)。

(17) 中國社會科學院考古研究所編著『張家坡西周墓地』(中國大百科全書出版社 一九九九年) 六八頁。

(立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所客員研究員)

